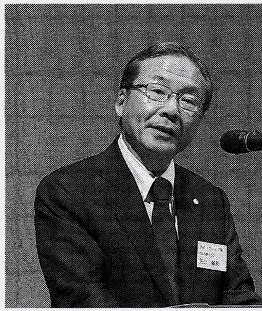


# 真のビジネスパートナー目指して

## グローブシップ開く

グローブシップ(株)は11月27日、東京・千代田区の東京商工会議所クランドホールで取引先を対象としたセミナーを開催した。第1部は(財)都市防災研究所理事・守茂昭氏による「BCPのトレンドと管理責任」、第2部はソフトバンクロボティクス(株)吉田健 常務執行役員とグローブシップ(株)瀬本陽 郎常務執行役員による「ロボットファシリテイマネジメント」の講演が行われた。



「最高の品質と技術の提供」を旨とする矢口敏和社長

冒頭、あいさつに立った矢口敏和社長は、「戦略FMパートナーとしてのグローブシップというキャッチフレーズには、当社が取り換え可能な企業ではなく、欠くことのできない戦略的ビジネスパートナーとして認められてもらえるよう、高い提案力を持った会社になりたいという想いを込めている」と述べ、さらに「当社の願いは

お客様に最高の品質と技術のサービスを提供し、真のビジネスパートナーとして認めていただくこと。こうした想いや志を実現するために、多くの課題や障害を乗り越えて挑戦していきたい。当社この想いがひとりのよがりや押し付けとならないよう、お客様からの今日の講演への忌憚のない意見をいただき、経営に活かしていきたい

い」と語った。

### ●BCPの責任と管理責任

第1部、守茂昭氏によるBCP(事業継続計画)の今日的あり方と、そこで生まれる管理責任についての講演で守氏は、これまでの防災計画に足りないものとして、「かつてはビルや家など拠点を守る考え方だったが、現代では膨大な帰宅困難者など、多数の移動する市民が形成する暫定コミュニティの管理が必要とされている」とし、移動し続ける市民にも対応できる防災が必要とした。

それ踏まえた「防災コンセプトの変化」では、「BCPの場合、自社の機能を継続させるため、どこかにポイントを絞ってそこだけを持続可能な形をとることが重要」とした。東京都は、自社のBCPを完成させ、安全を確保したうえで、帰宅困難者の二次滞在の世話をすることを推奨している。

の危機を逃れた後に必要となる要素(通信、電気、トイレ、担い手)その次に本格復旧に必要な要素(医療機能、上下水道、物流機能など)となるが、BCPでは幹線沿いのエリアごとに「どのような事態に陥っても日常通りに機能する拠点」を作ること、大災害時にも素早く復旧ができること、

だが、自社施設に帰宅困難者などの二次滞在の場を設けたとして、そこで不注意などから事故が起きた場合、現行の法制では個人や企業に損害賠償請求がなされる可能性がある。入口に「一切の事故責任を負わない」と明示する、あるいは避難所名簿と同様の但し書きをすることなどで、責任を緩和することが必要となる。BCPを実践する上で留意する必要がある。

守氏は、「防災は建物単体で考えるのではなく、エリアで考えることが必要。朝起きて生きていく良かたと思える街を作ること、始めて任人が街を守ろうと思える」と訴えた。



守茂昭氏



諸橋勝悟氏

●グローブシップのBCP対策  
第2部では、AI清掃ロボットWhizの導入について、Whizの導入による業務支援が注目されている。Whizは一度ティーチングすれば翌日から同じルートで指示された箇所を均一に清掃する。特にカーペット清掃の効果は高い」と述べた。

●ロボットファシリテイマネジメント  
第2部では、AI清掃ロボットWhizの導入について、Whizの導入による業務支援が注目されている。Whizは一度ティーチングすれば翌日から同じルートで指示された箇所を均一に清掃する。特にカーペット清掃の効果は高い」と述べた。



吉田健一氏(左)と瀬本陽一郎氏

●ロボットファシリテイマネジメント  
第2部では、AI清掃ロボットWhizの導入について、Whizの導入による業務支援が注目されている。Whizは一度ティーチングすれば翌日から同じルートで指示された箇所を均一に清掃する。特にカーペット清掃の効果は高い」と述べた。

●ロボットファシリテイマネジメント  
第2部では、AI清掃ロボットWhizの導入について、Whizの導入による業務支援が注目されている。Whizは一度ティーチングすれば翌日から同じルートで指示された箇所を均一に清掃する。特にカーペット清掃の効果は高い」と述べた。

育でのコストなど、多くの問題が山積しているとした。  
現在、Whizの導入台数は70台。年内に100台の導入を目指している。  
ロボットと人間の協働を模索する中で、キーワードとして「ゆとり」が浮かび上がってきた。「清掃の現場では当日欠勤が頻繁に発生する。そこをロボットが補完できれば、責任者の精神的負担は軽減される。ロボットが機能すれば従事者が計画的に休みを取ることができる」と瀬本氏。そうした「ゆとり」が業務品質の担保や従事者の働き方改革など、業務内容の進化、人手不足の解消につながっていく。  
Whizの導入によって生まれた「ゆとり」がさまざまな改善につながっていく。  
「今後の計画では、まず今年度中にWhizの導入をモデル化していきたい。これまでに100%人が行った現場にロボットを導入するのは難しく、人が行う作業工程のティーチングがうまくいかなければ現場に投入できない。専任チームがロボットを含めたワークスケジュールを新たに構築している。さらには次世代の清掃業務・清掃革命を起していきたい」と、瀬本氏は語った。